

「シッディ・クール」と「屍語故事」(下)

烏力吉巴雅爾 著
西 脇 隆 夫 訳

訳文「シッディ・クール」と「屍語故事」(上)で紹介した梗概は、漠南と漠北のモンゴルで広く伝わっていたモンゴル語版の話である。その全体の構造から見ると、どうやら二つの部分から構成されている。その境界は第13章の結語によって分けられている。その結語の意味はかなりあいまいであるが、チベット語テキスト第13章の後の結語と対比すると、かなり明らかになるだろう。

Slob dbon klu sgrub snying po dang bde
spyod bzang po gnyis kyis mdzad pai ro
dngos grub can gyi ngo mtshar rmad du
byung bavi gtam rgyud levu bcu gsum pa.

竜樹寧布導師と徳吉桑布の二人が書いた
奇妙な屍語故事第13章

その後の結語

ro dngos grub can gyi sgrung las bram
zevi khyevu rgyal por gyur bavi levu ste
bcu gsum pavo // rgyal pa gnyis pa klu
sgrub zla zer gyis /mi dbang bde spyod
bzang povi kun da yi/thugs rgyud me tog
gsar ba smin mdzad pavi/ vjig rten lugs
kyi gtam rgyud rjes vbrang vdi/mkhas
dang byis pavi rna bavi bcud len phyir /yid
vphrog bung bavi glu dbyangs rtser son pa/
bstan bcos vdab brgyavi tshal las byung ba
dang /sgrub rig mkhyen pa mngav la thob
pa dang /tshig sdes re tsam rang gi blo yis

kyang /bstan bcos vbum phrag brgyan pavi
gtam phreng vdi /mi dbang stobs ldan dge
bavi gsung phyir du /lho phyogs srin movi
mkhas pas phyi vdi/gtsug lag rig gnas lnga
la blo sbyong bavi/vbyor bavi pantita zhes
bya bas bkod /bstan bcos vdi ni gang du
gnas dang sbyangs de ni thun mong dngos
grub vbyung ngo zhes /klu sgrub gsung
bzhin thogs pa med par thog //

これは『魔屍成就故事』中の「バラモンの子が国王になる」という第13章である。第二殊勝の竜樹の月光によって、人君徳吉桑布の心中の新鮮な白蓮の花が開く。世間の習わしに従って伝えられた賢者と凡夫の心を得るために、人を魅惑する蜜蜂の歌声がつぼみの先に漂う。成就学に通じて政権を掌握した者は、あたかも白樺の林を歩いて来て、簡単な韻律で自分の智慧を十万の仏典を飾る言葉に集めることができよう。この作品は人君大力士の善言の勧めを受けて、南方羅叉の道に精通した若者、かつて五明学寺院で修練した覚日巴班第達が集めたものである。竜樹の述べるように、当該典籍はいずこに置かれて学ばれても、疑いもなく共同の成就を表わすであろう¹⁾。

モンゴル語とチベット語を通して、私たちはつぎのようなことが分かる。この説話集の

前半は、竜樹と徳吉桑布が書いたものであり、後に「人君大力士」(mi dbang stobs ldan) という者の提案で、「覚日巴班第達」(vbyor bavi pantita) という人が、後半の13章をそれと一つに合わせたのである。

前におこなった26章本の物語の梗概から見ると、前半13章の末尾にはしめくくりの言葉があり、後半13章の末尾にはないため、そのいわれについてはそれ以上詳細な言葉が見られない。

ダムディンスルン氏によれば、モンゴル語版「シッディ・クール」後半13章を書き写した者は、その結語の中でチベット文字の配列で組み合わせ、巧みに自分の名前を残しているとのことである。いま私たちはそのモンゴル語とチベット語をそれぞれ以下に示そう。

vid uhagan(4)-u ujugur(3)-un door-acha chidagchi(7) yin gar(2) eyer erguhu ba deger-e inu durben chag-un garudi(4)-yi nisgeju ehe-yin ilchi(3) ber ugtugulugad erheten-u(6) nidu inu ujemjitai gou-a dursutei(1) hubegun eyer segel(4) eche dagagulugad sumun(5)-u nidun(2) deger-e gal(3)-i badaragulugad agula(7) yin hurustu(1) saran(2)-u usun(4)-i urushaju tologai(1)-yin ujugur(3) eyer degegshi tatagchi.

ヴェーダ学の頂きを下から上へ能ある者の手で持ち上げ、四季の鳳凰がその上を飛び回り、母の温かい思いで迎え、眉目秀麗な少年を従わせ、眉に炎をともし、天より降りし甘露は、おもいきり頭を上へ持ち上げる。

rig byed mchog ma sngon du btang/thub dbang dang po mgo la bzhugs/mdav yi gzugs ni dkyil du btsugs /dus kyi chu bos

mthav skor te /steng duvang de nyid ches cher gtor/dbang povi rtse mos vphul ba la/gdod ma me chen dbus na vbar/ri yi gzugs can gdan du btings/ro yi dwangs mavang vog tu mnan/ sa vdzin chu gter phyi vbab pavi/ming can zhig gis kha vthor ba/bsdus pavi dge legs vphel rgyas shog//

ヴェーダ経を持ち上げ、勝権は頭を持ち上げ、矢は的の中にあり、時に水はそれを廻り、適時、手厚いお供えをそろえて、最高権力者にささげ、火を胸の中で燃やし、高山はなおもそびえ、清潔な屍を弔い、地上のダムは溢れ、名は損なわれ人は離ればなれになり、徳を積み善い行いが盛んになる²⁾。

あたかも文字の遊戯のような結語は、いったいなにを言っているのか？ 推測しにくい。ここからは、「シッディ・クール」後半13章の作者、訳者あるいは編者に関する情報を得ることはできない。

ダムディンスルン氏は、この一節を書いた人が洛桑次仁と言い、20世紀初めにモンゴル国のボルガン（宝勒干）省一帯の名僧で、多くの著作があったとしている。かれはかつて26章本「シッディ・クール」を編集し、チベット語『子経』の中から「シッディ・クール」の第27章すなわち「13段のはしご」を選んだ。モンゴル社会科学院出版社はモンゴル語とチベット語二種類の対照形式によって、1963年にウランバートルで出版した。

じつは「13段のはしご」の内容を読みさすれば、それとモンゴル語版「シッディ・クール」とは大いに隔たりがあることに気がつくであろう。もしも「シッディ・クール」の主要な人物—サインアムグラントゥ、シッディ・クール、ナカザナがこの物語の冒頭と結末に設定されて

いなければ、それと「シッディ・クール」とは一つに結びつけられないであろう。

「13段のはしご」はつぎのように語っている。インドのある大商人が、遠方に出かけるときに二羽の鳥に命じ、正直鳥が外務を管理し、鸚鵡が家内のことを処理し、自分の妻と女中が厳しく家訓を守り、悶着を起こさないようにと言った。

商人が不在のあいだ、その地方の可汗が13日間のカーニバルを催した。商人の妻と女中は鳥たちの忠告も聞かずに、勝手にカーニバルに参加し可汗と出会い、夜に商人の家で会うことを約束する。正直鳥はこのようすに気がついて鸚鵡と相談し、しっかりと家を守り外部の者を入れようとしなかった。正直鳥は13段のはしごの第1段で、夫人が慎重に友人と交わり、行動も慎むようにと説得する。翌日、妻と可汗が会うと、また夜にあいびきすることを約束するが、正直鳥にすべて見られてしまう。鸚鵡は門を閉め、正直鳥がはしごの二段目を上り、物語を語る。その後の話は基本的にこのような形式で語られている。

元の「シッディ・クール」はモンゴル語版であろうとチベット語版であろうと、いずれもサインハンが最後にどうして声を出さずに不思議な屍体をナカザナのところまで背負ったかというのを明確に述べていない。けれどもここに一つの説明がある。不思議な屍体がサインハンに算数の問題を出している。「13段のはしごの各段に13羽の鳥がいて、どの鳥の口にも13粒の米粒があるが、ぜんぶで米粒はいくつになるか?」。サインハンはその数字を計算して、ずっと声を出さずに、ナカザナーこれも明らかに人為的な設定一のところに来て「13段のはしご」こそ「シッディ・クール」の末尾であることを証明しようとする。

その他に、この書の中には別の説明も見られる。阿底峽尊者が仲頓巴に語った「父経」には26章あり、それは26章本「屍語故事」とならかの関連があることを暗示している。じつは、「13段のはしご」は仲頓巴の伝記であり、仲頓巴の二人の弟子が書いたので、「子経」とも言い、後に阿底峽がそれを「屍語故事」と一つに合編したからである³⁾。これらの暗示についてはさらに探索しなければならない。

チベット語版「屍語故事」の研究者の紹介によれば、それはチベット族社会で口頭によって伝承されただけでなく、多くの木刻本と写本があるとのことである。その中で青海版13章本だけは作者が竜樹と徳吉桑布であると表記している。その他の四川省徳格の16章本、甘肅とチベットの21章本、および青海の24章本には作者を表記していない。解放後にチベットで21章本を、青海で24章本を出版した。この2冊の話にはかなり似ている話、基本的に同じ話、さらに完全には同じでない話がある。同じか似ている話を除いて、二種の版本には独立で章を構成する話として35篇があり、すでにインドの「僵屍鬼故事」の25篇の数を大きく超えていたのである⁴⁾。

筆者の手元にある青海出版の「屍語故事」は、その書名を『説不完的故事』(mi ro rtse sgrung)と言い、序言(gleng gzhi)以外に、24章ある。その目録は以下のとおりである⁵⁾。

1. 六人兄弟 (spun zla drug)
2. 乾賽という人 (dran gsal)
3. 大工クンガ (shing bzo kun dgva)
4. 金湖と銀湖という娘 (gser mo mtsho dang dngul mo mtsho)
5. 金を吐く人とトルコ石を吐く人 (gser gyu skyug pa)
6. 農夫と暴君 (so nam pa dang rgal bo)

- gtum po)
7. 恩に報いる (drin lan vjal ba)
 8. 兄弟二人 (phu nu gnyis)
 9. 金持ちがどろうぼうをする (phyug pos rku byas pa)
 10. 鳥衣を着た王子 (bya shub rgyal bu)
 11. 貧しい子と竜女 (bu dbul po dang kluvi bu mo)
 12. まだら牛が牧童を救う (vbri khra bos na gzhon bskyabs pa)
 13. 豚の頭の占い師 (mo ston pag mgo)
 14. 賽諍という娘 (bu mo gser sgron)
 15. マサンヤルカサ (ma sang ya ru kha khra)
 16. 靈魂の転生を学ぶ者 (vpho ba grong vjug slob pa)
 17. カエルと姫 (sbal ba dang gras mo)
 18. ものを言わない娘 (kha mi grag bavi bu mo)
 19. 嘘を言わない馬飼 (rdzun mi sma bavi rta rdzi)
 20. 牧童 (phyugs vtsho bavi byis ba)
 21. 石の獅子が口を開ける (rdovi seng ge kha gdang pa)
 22. 妖魔三兄弟 (bdud po spun gsum)
 23. 勇敢な娘 (bu mo snying vdzin)
 24. 勤勉な三人娘 (las la brtson pavi bu mo gsum)

これは現在見ることのできるモンゴル語26章本「シッディ・クール」と最も関係が密接なテキストである。その中のモンゴル語本第1章とチベット語本の序言、第2章と5、第3章と15、第4章と13、第5章と8、第6章と6、第7章と10、第8章と3、第9章と23、第11章と14、第12章と2、第15章と16、第26章と11、ぜんぶで13篇の話は同じであるか、基本的に

同じものである。これはダムディンスルン氏がかつて比較と統計を行った「モンゴル語前半13章中で5篇は完全に、2篇は不完全に、あわせて7篇がチベット語から翻訳した」数よりもずっと多い⁶⁾。モンゴル語の第10章、第13章、第14章および第16章から第25章まであわせて13章の内容はチベット語『説不完的故事』にはなく、チベット語の4、7、9、12、17、18、19、20、21、22、24のあわせて11章の内容はモンゴル語「シッディ・クール」の中には見られない。

モンゴル語「シッディ・クール」中不在の11章の内容の梗概はつぎのとおりである。

第4章 ある国王はたいへん豊かでも、財産を受け継ぐ息子はいなかったが、セモツォ（賽毛措）とソグユモツォ（鳥毛措）という賢くて美しい娘が二人いた。娘たちの女中はシンダモ（辛達茂）と言った。ある日、女中は二人の娘を深い河のほとりまで遊びに連れて行き、悪くみをして、姉妹を河の中に沈めてしまった。それから理由を作って家にもどらず、妹娘を連れて異国に逃れた。うまいぐあいとその国の王子三人が妃を選ぶところにぶつかった。王子たちは押しよせる娘たちに矢を放ち、矢に当たった娘が選ばれる習わしだった。幸いにも三本の矢がソグユモツォの体に落ちた。しかし、シンダモはこっそりすり替えて、自分が王妃になり、ソグユモツォを召使いにしこきつかった。

ある日、ソグユモツォは河辺まで羊を放牧しに行き、父母と姉のことを思って泣いた。突然、姉が水中から浮かんで来て、自分はシンダモに騙されて水に入れられたが、竜王に助けられて王子と結婚したことを妹に話した。姉は妹を慰め、辛い日ももうすぐ終わると告げた。

シンダモを妃に選んだ三人の王子は、兄たち二人がわけもなく死に、弟は病気になるまで

ある日、シンダモは自分で一日放牧に行き、野外で気を紛らわしたいと言い、ソグモツォに病気の王子の世話をさせた。娘は自分が出会ったことおよびシンダモが魔女であることをすべて弟の王子に話した。じつはシンダモは王妃になってから、魔法を使って兄の王子たちの心臓を食べてしまったのだ。

そこで、ソグモツォと王子はすぐさま行動し、戸口に深い穴を掘り、しっかりと蓋をして、辛達茂がもどったら、彼女をその中に埋めてしまうことにした。計画はすらすらと運び、なにもかもうまくいった。王子とソグモツォは夫婦となり、幸せな暮らしをおくるようになった。

第7章 ある農民は財産をすべてロバと荷物二つに変え、他郷に行って暮らそうとした。途中で、子どもたちが一匹のネズミをいじめているのを見て、農民はかわいそうに思い、荷物とネズミを取り換えてしまった。続けて行くと、子どもたちがサルをいじめているところに出くわし、また荷物とサルとを交換した。さらに前へ進むと、子どもたちがクマの子をいじめているのに気がつき、唯一の財産つまりロバとクマの子を交換し、それから動物たちを放してやった。

無一物になった貧乏人はある家の戸口まで来ると、前方から主人に追われたこそ泥が走ってきた。こそ泥は品物を貧乏人に押しつけ、すぐさまぬれぎぬを着せ、主人に自分がこそ泥を捕まえたと言った。罪に陥れられた貧乏人は皮袋に詰めこまれて河に投げこまれた。

しばらくして、貧乏人は河辺のほうに引っ張られた。じつはかれの放したネズミが水中にいる命の恩人に気がつき、サルとクマの子を呼んで、いっしょにかれを救ったのだ。深夜になって、クマの子は発光している丸石を見つけて来てその貧乏人にあげた。飢えてこがえていた貧

乏人は丸石に祈り、快適な住まいとおいしい料理を望むと、ふしぎなことに、なにもかも実現した。それから、その宝の石に祈ると、ほしい物がすべて思いどおりになった。

ある日、貧乏人の親友が訪ねて来て、かれが宝の石で財産をつくり金持ちになったことを知り、哀れな顔つきで宝の石を借りた。人のよい貧乏人は宝の石を親友に貸してやった。あくる日、自分の家と財産がすっかりなくなり、またもや貧乏になってしまった。そのようすを知ったネズミ、サルとクマの子はふたたび協力しあって、とうとうあの恩知らずの親友から巧みに宝の石を取りもどし、かれらの命の恩人 helped。

第9章 ある賢い貧乏な子どもと年をとった母親が二間のあばら家で暮らしていた。貧しい子はいつもくず鉄を拾っていくらかのお金に換えて食べ物を買ひ、なんとか生計を維持していた。かれには金貨一枚が残り、命のように大事にして、やむを得ない時まで使わないようにしていた。

かれらの隣人はよくばりな金持ちで、しかも恥ずべきこそ泥だった。ある日、かれは貧しい親子の家の客になった。賢い子どもは客が悪いやつだと知り、どのようにもてなそうか考えていた。この時、母親が別の部屋でらくたを動かす音を金持ちが耳にして、隣人は興味ありげになにかと尋ねた。子どもは母親が金を数えている音だと言って、その部屋から一枚の金貨を持って来て金持ちに渡し、これは我が家に來られた感謝の気持ちを表したものだと言った。金持ちは大喜びで、帰るときに部屋の中をじろりと見ると、部屋の中にふくらんだ袋が確かにあるので、金がそこにあると思った。母親は息子がどうして唯一の金貨を欲張りなやつにやったのか分らなかったが、息子は金貨を取りもどす

方法があると言った。夜が深まると、あの欲張りな金持ちはこっそり貧乏人の家に来て、がらくたの詰まった袋を持って行こうとすると、若者が眼の前に現れ、大声で言った。「どうして深夜に人の家の財産を盗むの？」その場で捕まった金持ちは許しを求め、言いふらさないでくれと頼んだ。子どもは役所に告げると言いやり、金持ちはびっくりして千両をわたして、この件をうやむやにした。

第12章 ある家の兄と妹は父母を失くし、ある金持ちの家で働いていた。ある日、兄は柴刈りに出かける前に、妹にこう告げた。この家には黒、白、黄三種の毛色の馬がいるが、それぞれ馬と同じ色の泉に連れて行き、決して間違えては、混ぜこぜにしていけない。それから、白色の石で泉の口にくぼきをした。幼い妹は馬に水を飲ますときに兄のいいつけを忘れてしまうと、すぐさま地下から妖怪がとび出してきた。そのくちびるは上下に長く、二つの乳房は肩にかかり、全身が毛だらけだった。そいつは少女をつかまえ、馬を追って行ってしまった。兄がもどって妖怪を追いかけたとき、女の子を捨てて兄を連れ去った。

妖怪は山の洞窟に入ると、馬の肉を食べ、馬の血を飲み始め、男の子を柴刈りに行かせた。男の子はノロと出会った。ノロは男の子が泣いたり笑ったりしているわけを聞いてから、あくる朝に助けに来ると話した。あくる日、ノロは来たけれども、男の子を救えず、逆に妖怪に自分の命を奪われてしまった。つぎの日、妖怪はまた男の子を柴刈りに行かせると、ぶち牛に出会った。牛は男の子が苦しんでいるわけを知ると、あくる日に助けに来ると話した。つぎの日、男の子は計画どおりに牛に乗って、洞窟を逃げ出した。妖怪がいまにも追いつきそうになると、妖怪の弓矢と魂を隠した針を折って、危

険を脱した。

ある日、ぶち牛は男の子に「わしを殺し、それから皮を剥いで広げたら、わしの心臓を皮の中に、腰を皮のそばに置き、毛を皮のまわりに散ばせれば、妖魔を捕まえらるだろう」と話した。男の子はどうしようもなく、牛の言うとおりにした。つぎの日、かれが眼をさますと、自分が家、家畜と二匹の犬を手に入れただけでなく、美しい妻がいることに気がついた。じつはどれも牛の皮や毛や器官が変わったものだった。

第17章 ある貧しい夫婦に子どもがなく、国王のため水を運んで暮していた。ふたりが年をとって動けなくなったとき、一匹のカエルを手に入れた。カエルは大きくなると、国王の娘三人から一人を妻に選びたいと言いはった。父母が申込みに行くと断られ、カエル自身が出かけ、奇妙な鳴き声で国王の宮殿を震わし、国王はやむなく末の娘を嫁がすことを承知した。娘は興入れすると、カエルの家が貧しいのも嫌がらずに父母の仕事を手伝った。まもなく、この家の屋敷は国王の宮殿に見劣りしないように変わった。じつは、カエルは竜の子だった。

末娘の姉二人はそれを知ってからたいそう悔み妬んだ。姉たちは妹を訪ねる機会を利用して、妹を殺し、その死体をしきいの下に埋め、それから妹とその召使に扮して。カエルといっしょに暮らした。まもなく、しきいから大きな杏の木が生え、木に美しい母子鳥二羽がとまっていた。カエルは母子鳥の会話から自分の妻と子と知り、少しもためらわずに姉たちを処罰し、一家は幸せに暮らすようになった。

第18章 ある貧乏人と金持ちと役人の子どもが友だちになった。かれらのところから遠く離れて、若くて美しい娘が住んでいたが、これまでどんな求婚者にも承知しなかった。三人は

誓いを立て、三人の中でだれかが娘を説得して妻にしたら、他の二人は花婿と花嫁に財産の半分を分け与え、かれらの召使いになることにした。

役人と金持ちの子はたくさんの権利と財産を持って求婚したが、門前払いをくらってしまった。最後に、貧乏人の子はツェンパを持って出かけた。途中で老婆に会い、飢えているようすを憐れんで、自分のツェンパを老婆にあげた。老婆はこの若者が前に会った二人の若者よりも誠実なのを見て、あの娘の身の上を話してやり、かれが自信をもって追及するように励ました。若者が娘の家に行くと、娘はやはり相手にしなかった。若者は辛抱強く「私たちは前世で縁があり、かつてふたりが雌雄の鳥や虎で、共に楽しい暮らしをしていたのを忘れたのですか？」と語った。娘はその暮らしが二人の前世において無知な子に水で、凶悪な狩人に火で壊されたのを思い出した。同病相憐れむ若者二人は意気投合した相手を見つけて、すぐさま結婚した。役人と金持ちの子は約束を守り、財産の半分を分けて、召使いになった。

第19章 甲乙二軒の豊かな家があり、勢力と財力は似たりよったりだった。しかし、甲家の主人は乙家の財産をうばいとして自分のものにしようとした。かれは乙家に一頭の名馬と嘘をつかない牧者がいるのを知っていて、これから手を下そうとした。かれは乙家の主人と賭けをした。もしも乙家の牧人がうそを言ったら、乙家の財産を没収し、甲家のものなる。牧人を試してうそを言わなかったら、甲家の財産は乙家のものになることにした。

牧人はあるへんぴなところへ放牧に行かせられた。ある日、たいそう美しい女が牧人のところに来て、家事を手伝い、長らく泊っていたので、牧人は幸せに思った。ある晩、牧人がもど

ると、その女はひどく重い病にかかり、どうしてよいかわからず慌ててしまった。女はこの病は治しにくいと言うと、牧人は治せるなら、自分の肉を割いてもかまわないと言った。女はあの名馬の肝を食べさえすれば治ると答えた。牧人は雷に打たれたように、名馬のもとに走って行った。その名馬は女の言うとおりにするよう勧めた。名馬は殺され、女の病気は良くなったが、その行方は分からなくなった。

甲家の主人は乙家の主人を招き、酒の席で牧人が名馬を殺したことを言い出した。乙家の主人は信じず、人を遣わして牧人に問いただした。牧人はみんなの前でできごとをすっかり話し、一言もうそがなく、甲家の主人は賭けに負けてしまった。

第20章 ある貧しい子どもが故郷を離れ、ある牧畜主の家で牧畜をし、あばら家に住みこんだ。家の中にいたのは三人の友人犬、猫と鸚鵡だけだった。毎日、放牧した報酬はいくらかのツェンパだけで、かれは友だちと分けあって食べていた。ある日、貧しい子は急に重い病にかかり床に臥せて起き上がれず、こんこんと眠っていた。しばらくして、かれはぼんやりと話し声を耳にした。じつは友だちがかれの病を話しあっていたのだ。あくる日、友だちは羊の群れの中から黒い羊を殺し、その血で主人の体を洗い、主人に羊の肝を食べさせると、主人はすぐに健康を回復した。

ある日、貧しい子はふたたび犬、猫と鸚鵡が牧畜主の子どもの病について話し合っているのを耳にした。かれらは、この子の病のものは耳の中にあり、もしも古い藍色の布を火であぶって、水で湿らしてから耳の中に入れ、同時に太鼓をたたけば、その病はすぐに治ると話していた。牧人はすぐに牧畜主の家に行って、友人たちの言うとおりに病を治すと、子どもの耳から

小さな黒い虫が出てきて、子どもは健康を回復した。牧畜主は子どもの恩に報いるため、自分の娘をかれに嫁がせ、たくさんの財産を分け与えた。

第21章 柴刈りをして暮らしている人が、毎日、山で柴刈りをして、休むときにいつも石の獅子のそばに坐り、食事のときにはいつもツェンパとバターを獅子の口に入れてやった。ある日、獅子がふいに口をきいて、「あした、早くに袋を持ってくれば、少し物をあげよう」と言った。柴刈りが時間どおりに来ると、石の獅子は「わしの口の中に手を伸ばし、金をつかんで袋に入れなさい。でも、太陽が昇る前にはかならず止めなさい。

さもないと、おまえの手は永遠にわしの口の中に留まってしまうぞ」と言った。柴刈りは金をいくらか持って、石の獅子に感謝して家にもどり、それからはもう柴刈りに行かなくなった。かれは新しく家と家畜を買った。隣人たちはかれがどのように金持ちになったか尋ね、かれは一部始終を話した。

隣人のひとりが金もうけをしたくて、柴刈りのしたとおり、毎日、石の獅子のそばで柴を刈り、やすむときに獅子に食べ物を分けてやった。しばらくして、石の獅子はかれにも金をやることを承知した。その隣人はあくる日とりわけ大きな袋を持って来て金を詰めた。まもなく太陽が出るときに、獅子は帰るように勧めたが、かれはもっとたくさん欲しがった。ところが、太陽が出ると、石の獅子はぴたりと口を閉ざし、かれの手をしっかりとはさんでしまった。

第22章 ある村に母と娘だけの一家が住んでいた。母親が口に出して、誰かが娘の名前を知ってしまうと、娘はその者に嫁がなければならなかった。妖怪の三人兄弟が娘を嫁にするために、ウサギ、キツネとカラスに娘の名前を探

らせに行かせると、知ることができて、娘を娶り、彼女を休ませずに働かせた。

ある日、兄弟三人が出かけるときに、休まず働き、裏門をあけるなど娘に告げた。かれらが出かけると、娘は興味ありげに裏門をあけると、庭の中はすべて人の骨だった。その中で人の皮をかぶって瘦せた老婆はまだ生きていて、早くこの恐ろしいところを離れないと、すぐに災いに遭うからと娘に言い、自分の皮を護身服として娘に与え、軽々しく脱ぐなど教えた。魔の手から逃れた娘は、広々とした湖のほとりで人の皮を脱いで頭を洗っていたときに、国王の家で放牧していた子どもに見られてしまった。あれこれあった後に、この娘はおしまいに国王と結婚し、妖怪の三人兄弟のたくらみを見破った。

第24章 貧しい母と子二人が占いで生活を維持していた。ある日、国王はその息子に自分の夢を解釈させると、占った息子は国王を見つめながら笑うだけでなにも言わなかった。そこで、国王はひどく怒って、懲罰として羅刹王の髪の毛を取りに西方まで行くように命じた。かれは母親に別れを告げて出発した。

西へ行く途中で、かれは二人の老婆の家に泊まり、それぞれ夜に突然襲って来た巨大な鳥と毛だらけの怪獣を負かした。二人の老人はかれが勇敢なのを見て、もどってきたときに自分の娘を嫁にやることをそれぞれ承知した。続けて西に行くと、かれはうまく羅刹王の宮殿に紛れこみ、勇敢に勝負して羅刹王に勝った。羅刹王はその髪の毛を与えただけでなく、娘もかれに嫁がせた。

羅刹王の髪の毛を手に入れた若者が、三人の美しい娘を連れて来たので、国王は非常に恐れて妬ましかった。国王は、その髪の毛が羅刹王であろうとなかろうとかまわず、一昼夜で宮殿

を建てなければ死刑にすると。あわてた若者がこのことを連れて来た三人の娘に告げると、娘たちは、だいじょうぶ、宮殿はすぐにできますと答えた。じつは、三人の娘はそれぞれ羅刹女、天女と竜女だった。

あくる日、新しい宮殿が国王の宮殿のそばにそびえていた。国王は、庭や花壇や鳥のいないのはだめだから一昼夜でそなえろと命じた。娘たちは一致協力したため、国王の宮殿よりもずっとすばらしい建物がみんなの前に現われた。国王と大臣たちは美しい建物に満足し、欲張って花壇に踏み込め、つぎつぎと水の中に入っておぼれ死んだ。人びとは若者を国王に押しいただき、その母親と娘たちを新しい宮殿に移した。若者はかつて国王の夢を見たときに現れた予兆が一つ一つ実現するのを思い出して、こっそり微笑んだ。

以上のような簡単な比較と内容の梗概から見ると、「シッディ・クール」と「説不完的故事」のあいだで互いに重複する部分はおおよそ前半13章に集中している。私たちは、これがそれらの核心であり、その他の話は大部分がこれら核心の話をめぐって、あるいはそれらを拡張して新たに編成した痕跡が見られる。

ある興味ある現象は、わたしたちがモンゴルの民話の中から、「シッディ・クール」のいくつかの話と非常に似ているものを容易に見つけ出すことができる。たとえば、『オールドスの民話』中の「年寄りの夫婦」、「王子と家臣」、「ロバの耳の可汗」はそれぞれ「シッディ・クール」の第17章、第15章と第25章と同じなのである⁷⁾。

また、モンゴル族のだれでもが知っている「パラゲンザンの話」⁸⁾の中には、「シッディ・クール」の第8章と第23章と同じ内容のものがあ。さらに青海モンゴル族に伝わっている「三

枚の金貨」⁹⁾の話と、モンゴル国の民間伝説「三歳のメンヨウ」¹⁰⁾は、それぞれ「シッディ・クール」の第13章と第21章と同じである。

「シッディ・クール」中の第10章と第20章の話は、モンゴルの民話にはあまり見られないが、それらはサンスクリット語とチベット語の民話と密接な関係がある。前者のある筋は「蘇布喜地」¹¹⁾の中に見つけられ、後者の内容は「五巻書」¹²⁾の詩につけられた「森の獅子と牛が日ましに強めていた友情が、非常に貪婪でずる賢いヤマイヌに壊される」という詳しい注解によく似ている。「シッディ・クール」の第16章の話はチベット語劇「スジニマ」の内容と似ていて、この劇の原本はインドに由来することである。

「説不完的故事」の中で「シッディ・クール」と関与しない章節について、まだ詳しい研究は行われていない。この論文では逐一そのいわれを解釈するつもりはないが、ここでは注目すべき現象を点検するだけで、後日に探究するつもりである。

「説不完的故事」の第17章は、あるモンゴル語の民話集の中で「カエルの子」¹³⁾という題で収められている。その第11章の筋と「シッディ・クール」の第16章はかなり似ていて、その主な筋は別の民話に収められている「布丹宝高的故事」¹⁴⁾ときわめてよく似ている。

「屍語故事」はモンゴル地域の民間で伝承されている以外に、その中のある章節、いくらかの筋やモチーフは、その他のサンスクリット語とチベット語の著作、例えば「五巻書」、「三十二個木人的故事」¹⁵⁾、「サキャ格言」¹⁶⁾、「寶貝修飾經」¹⁷⁾、「ゲセル汗伝」¹⁸⁾など、それらのモンゴル語と漢訳文は、絶えまなくモンゴル社会に流入し、モンゴルの民間文学の発展と豊富化に無視できない影響を与えたのである。

「魔屍故事」は直接にはサンスクリット語の形式でモンゴルに伝わったのか、それとも間接的にチベット語の形式でモンゴルに伝わったのだろうか？ 最初完全な文献の形式かあるいは口頭で伝わったのだろうか？ モンゴル人はおよそいつごろからこの話に接触し始めたのだろうか？ これらの問題について、この論文では基本的な推測以外に、より適切に答えられる根拠をまだつかんでいない。ただし、筆者は二つの例を引用して、以上でふれた問題に対して参考資料としたい。

1. その牛の年にチンギス・ハガンは、スベゲデイを鉄車で、トクトガの子のクドヤカル・チグランを追撃させに派遣する時、仰せられるには「トクトガの子のクドヤカル・チグランは往って驚き帰り、射ちあつたが。補馬竿をかけられた馬、矢にあたつた鹿のように往つた。かれらが、羽あるものとなって飛翔して天に上つたならば、スベゲデイおまえは、オオタカとなって飛翔して捉えないのか？ タルバガンとなつておのれの爪で這つて地に入つたならば、鋏となつてほじくりたずねて追ひ上らないのか？ 魚となつて湖・海に入つたならば、スベゲデイおまえは、引き綱、投網となつて掬い取らないのか？」¹⁹⁾

2. タタールの部民を殲滅殺戮するとき、タタール部のカルギル・シラは匪賊となつて出奔し、却つて困窮し餓えて帰り、母の帳幕に入り、「私は衣食を求むる者です」と言い、「衣食がほしい者ならば、そこにお坐り」と言われ、入り口の端に坐っていると、五歳のトゥルイが外から入つて来て、また走り出てゆくのをカルギラ・シラが立ち上がつて、そのトゥルイを腋の下にはさんで出てゆきながら、刀を抜いてゆこうとしたが、たまたまボロクルの妻のアルタニは、母上の帳幕内の東側に坐っていたが、母

が「子どもが見えなくなった」と叫ぶか叫ばないうちに、アルタニは後ろから続いてかけだし、カルギラ・シラの後に追いつき、かれの辮髪を捉えて、他方の手で刀をひいている手を引っぱると、刀は落ちてしまった。たまたま帳幕の北の方にジェティとジェルメの二人が角のない黒牛を食おうと殺していたが、アルタニの声を聞きつけて、二人は斧を取り拳を赤くして走つてきてカルギラ・シラを斧と刀でその場で殺してしまった。アルタニ、ジェティ、ジェルメの三人が子どもの命を救つた一番の功を争つたが、ジェティ、ジェルメの二人が言うには「おれたちがいなかったら、早くかけつけて殺さなかったならば、アルタニは女の身、どうなったことだろう。きっと子どもの命に危害が加えられたにちがいない。一番の功はおれたちのものだ」と言つた。そうすると、アルタニは「わたしの声を聞かなかつたならば、あなたたちはどうして来られたでしょう。わたしが走り追いついてかれの辮髪を捉え、その刀をひいた手を引っぱつたので刀が落ちたのですが、もし刀が落ちなかつたならば、ジェティ、ジェルメの二人がやつて来るまでに、子どもの命には危害が加えられたにちがひありません」と言つた。言い終えると、一番の功はアルタニのものとなつた²⁰⁾。

前の例では、互いに追ひかけ、最も緊迫したとき、追ひかけられている者が変身した瞬間に、追ひかけている者もすぐさま変身し、このようなことがくり返され、最後に相手に勝利する。このような「変換法」は、「説不完的故事」の序文にも現われている。後の例にはそのような逆境で共に戦ひ、勝利を得た後に「功績を争う」、「六親を認めず」という筋は、同じように「説不完的故事」の第1章に現れていたのである。これらの現象は決して偶然ではない。

筆者は自分の手元にあるモンゴル語「シッディ・クール」26章本とチベット語「説不完成的故事」24章本と比較し、先人の研究成果を加えて総合的に考察して、以下のような認識を得ることができた。まず、それらの源流はともにインドにあると肯定できること。つぎに、それらのひな形は13章によって構成され、その作者あるいは整理者は竜樹と関係があるらしいこと。さらに、テキストの形成はサンスクリット語版がチベット語版よりも早く、チベット語版はモンゴル語版よりも早い、言い換えれば、モンゴル語版はチベット語版から訳され、チベット語版はサンスクリット語版から訳された。最後に、覚えておかなければならないのは、この話はチベット地域とモンゴル地域で伝承される過程で、その地域の多くの民話を吸収したことである。だから、後に整理された版本であればあるほど、早期の版本との食い違いがますます明らかになるだろう。

原注

- 1) Tibetan and Mongolian tales of Vetala, tomus2, ウランバートル, 1963年, 第6頁
- 2) 同上書, 第10頁
- 3) 同上書, 第220頁
- 4) 佟錦華『藏族文学史』四川民族出版社, 1985年, 第83頁
- 5) 『説不完成的故事』(bod rigs kyi dmang khrodtam rgyud mi ro rtse sgrung), 西寧, 青海民族出版社, 1963年
- 6) 策・達木丁蘇榮等編『蒙古文学概要』, 呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 1982年, 第1048頁
- 7) 伊克昭盟蒙古語文弁公室編『鄂爾多斯民間故事』(内部)
- 8) 李成文, 多吉才郎訳『巴拉根倉的故事』(dpal lha kun bzang gi gtam rgyud), 西寧, 青海民族出版社, 1982年

- 9) 『青海蒙古族民間故事』, 北京, 民族出版社, 1986年, 第303頁。別に, この民話集の中の「羊の尾の子ども」と「豚の頭の古い師」は「シッディ・クール」第12章と第4章と同じである。
- 10) 『蒙古民間文学精華集』, 呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 1984年。この他に, この集の中の「7人のハゲと癩者」は「シッディ・クール」の第23章と似ている。
- 11) 『蘇布喜地』, 呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 1957年, 第234頁。実際はこの話は『五卷書』に由来しているらしい。漢訳本第43-48頁参照。
- 12) 季羨林訳『五卷書』, 北京, 人民文学出版社, 1981年, 第4頁。
- 13) 『衛拉特蒙古神話集』, 北京, 民族出版社, 1987年, 第234頁。この他に, この集の中で「白色宝袋的故事」というのは, 「説不完成的故事」の中の「鳥の衣を着た王子」のヴァリエーションの一つである。
- 14) 『肅北蒙古民間故事』, 呼和浩特, 内蒙古文化出版社, 1984年, 第1頁。
- 15) 『三十二木人的故事』, 内蒙古人民出版社, 1958年, 第246頁。別に, 陳弘法, 沈湛華訳『三十二個木頭人』, 呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 1982年, 「三十二個木頭人」と「魔屍」の二つの話を含んでいる。この訳文の内容とモンゴル地域で最も広く伝わっている二冊とかなり食い違っている。
- 16) 『蘇布喜地』注釈文, 第161頁には「あるバラモンが多くの敵に勝つ」という話は, 少なくとも四つの筋が「説不完成的故事」の第9章と密接な関係がある。この他に, 『蘇布喜地』第234頁の「機織の妻と床屋の妻」は「説不完成的故事」の第10章と関係がある。
- 17) 策・達木丁蘇榮編『蒙古古代文学一百篇』, 烏蘭巴托, 1959年, その中の第58篇が語っている第17, 23, 24の話は, それぞれ「シッディ・クール」の第13, 第2と第15章と関係がある。この他に, この本の第51篇は「シッディ・クール」第5章を拡大した文のようである。
- 18) 『格斯爾的故事』, 呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 1955年。

- 19) 額爾登泰など『蒙古秘史校勘本』, 呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 1980年, 第1008頁。日本語訳は, 小林高四郎訳『蒙古の秘史』生活社, 1949年参照。
- 20) 同上書, 第1019頁。

原 載 烏力吉巴雅爾著『蒙藏文化關係研究』(北京中国藏学出版社 2004年) 142-174 頁所載「關於《喜地呼爾》與《屍語故事》」
著者の烏力吉巴雅爾氏は, 中央民族大学蒙古語系の教授。